

<次世代育成> オープンキャンパスで女子高生向けの イベントを開催しました！

桐生キャンパス 女子生徒向けプログラム

7月26日・27日、桐生の理工学部オープンキャンパスにおいて、初めての「女子生徒向けプログラム」を開催しました。女子限定の学科横断研究室見学会ツアー、女子学部生による相談会、教員や女子大学院生による保護者を対象とした座談会、女子卒業生や石間広報委員長による講演会（男子生徒も参加可）と各日たっぷり4つのプログラムを行いました。延べ参加者数は120名（1日目50名、2日目70名）で、アンケートでも、「実際に使われている施設や研究内容を知ることができて良かった」「現役学生の方に直接お話を伺うことができ学生生活のことが聞けてとても参考になった」「卒業生の講演を聞いて、将来のことを考え過ぎずに今を一生懸命頑張ることが大事だと気付かされた」等の感想をいただき大好評でした。



荒牧キャンパス 女子高生向け説明会

8月2日・3日、荒牧キャンパスでは、初めての「女子高生向け説明会」を開催しました。群馬大学「まゆだまプラン」の概要説明、女子大学院生による研究室紹介動画の上映、女性教員（末松教授・嶋田教授・小林准教授・滝沢助教）や卒業生による女性の活躍紹介の3つのプログラムを行いました。午前と午後30分ずつという限られた時間でしたが、延べ参加者は402名（1日目180名、2日目222名）と予想を上回り会場に入りきれないほどでした。アンケートでも、「ビデオで生き活きとした様子が伝わった」、「大学が女性を応援していることを知って安心した」、「現場の先生や先輩の話がよかった」と大好評でした。



桐生キャンパスにてワーク・ライフ・バランス講座開催

「まゆだまプラン」において女性研究者数の増加が緊急の課題とされる理工学府での意識啓発のため、6月16日に桐生キャンパスでワーク・ライフ・バランス講座が開催されました。東レ経営研究所の渥美由喜研究部長を講師にお招きして、「介護・子育てをしながら、仕事で成果を上げる実践術 ～職場のリスク・マネジメントとして不可欠！～」と題してご講演頂きました。

先生ご自身の経験と多くのデータに基づいた説得力のある内容をユーモアたっぷりにお話しされたため、聴衆は楽しみながらも自身の抱える問題に気づかされ、それらと向き合えた事がアンケートから伺えます。52名の参加者の内訳は、男性24名、女性28名で、学生や学外からの参加もありました。「ワーク・ライフ・バランス？勿論理想だけど現状ではとても無理！」と言いそうな教授陣の参加が少なめだったのが少し残念ですが、管理職にある男性の満足度が高かったのは注目すべき成果の一つと言えるでしょう。

(意識啓発WGリーダー 工藤貴子)



■ 各キャンパスでランチミーティングを開催しています！ ■

荒牧・昭和・桐生の各キャンパスのまゆだま広場では2ヶ月に1回（昭和キャンパスのみ毎月）ランチミーティングを開催しております。ロールモデルとなる先生からのお話やDVD上映会等、毎回様々なテーマで行っています。どなたでも参加できます。皆様のご参加お待ちしております。



荒牧キャンパス



昭和キャンパス



桐生キャンパス



まゆだまライブラリー

各キャンパスのまゆだま広場では、男女共同参画、キャリア形成、子育て、介護、ワーク・ライフ・バランス関連の図書を随時貸出しております。お気軽にお立ち寄りください！

利用時間：各キャンパスのまゆだま広場の開場時間

利用対象者：教職員・学生 貸出期間：2週間

貸出上限：2冊まで

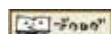
ホームページとブックログでも

まゆだまライブラリーの蔵書を公開中です！

ホームページ

<http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/>

ブックログ



<http://booklog.jp/users/g-sankaku8>



～まゆだまライブラリー蔵書から～

書評 坂東眞理子著

『凛とした「女性の基礎力」』（暮らしの手帖社）

理事（教育・国際交流担当） 石川 治



著者の坂東（旧姓：菅原）眞理子氏は東京大学文学部心理学科を卒業。1969年総理府入省、婦人問題担当室（男女共同参画室の前身）に最年少の担当官として参加した。その後、結婚、ハーバード大学留学、統計局消費統計課長、埼玉県副知事、在豪州ブリスベン総領事（女性初の総領事）、総理府男女共同参画室長、内閣府男女共同参画局長等を経て2003年退官。昭和女子大学教授、副学長、女性文化研究所長を経て同大学長となり現在に至っている。

坂東氏は行政官としての仕事と2児の母の役割を両立させた経験を生かし、女性としての振舞い方をエッセイ風に説いた『女性の品格』（PHP新書）を出版し、ベストセラーとなった。本書はその姉妹書と呼べる教養の書である。日常生活の些細なことから地球規模の問題に至るまで、坂東氏の視点から論じている。坂東氏の視点は極端に走ることなく、総じて常識的でバランス感覚のとれたものである。「女性」ゆえに選択したと思われるテーマも一部には含まれるが、論じられる内容は著者の「性別」を意識させない、「常識を備えた社会人」からの上質のメッセージである。

まず、男女を問わず「常識を備えた社会人」であること。その上で、性別・能力・感性をも含めた個性を発揮すること。以上が、本書全体の読後感である。

～男女共同参画推進室 室員より～

人として

意識啓発 WG

教育学部 准教授 小林 陽子



平成26年度から室員として、意識啓発WGで各種イベントの企画等に関わっています。専門は家庭科教育・家政教育です。とくに歴史に興味をもって研究を進めてきました。

「第一、女子を人として教育すること。第二、女子を婦人として教育すること。第三、女子を国民として教育すること」。これは教育実践家の成瀬仁蔵（1858-1919）が日本で初の女子高等教育機関を創設する際、多くの有識者にその必要性を説得し、賛成者を得るために著した『女子教育』（1896）という書物のなかの言葉です。女性を第一に人として、次に婦人として、そして国民として教育することが大切で、この順序を誤ってはならないと言っています。人と言えば男性を意味した120年前に、人としての教育を男女区別なく主張したことが評価されています。

現代の日本では男女共同参画社会の視点に立った法律や制度が少しずつ図られ、120年前のようなことはありません。しかしまだまだ、家庭や地域や職場等の生活の場においては、性別による固定的な役割分担意識が解消されたとは言えません。男性や女性という枠組みではなく、人として、誰もが働き続けたい、学び続けたいと思える大学づくりを目指した「まゆだまプラン」に微力ながら尽力したいと思います。

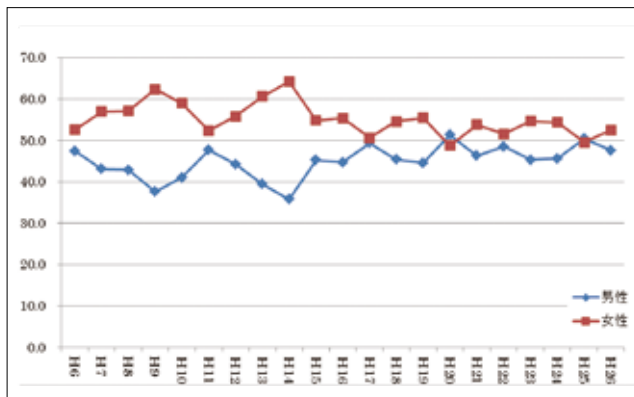
教育学部長インタビュー ～ 男女共同参画を語る～

インタビュー 豊泉 周治 教育学部長
インタビュアー 末松美知子 男女共同参画推進室長
(副学長)

女子学生・男子学生の割合は5対5

末松：まず、学生の状況からお尋ねします。

豊泉：平成6年から26年までの推移（下記グラフ参照）を見ると、以前は女子学生の割合が高かったのですが、ここ10年間男女差が小さくなり、50%前後になっています。



末松：どの分野でもばらつきがないのでしょうか。

豊泉：家政は女性が多く、技術は男性が多いです。教科別のデータでは各教科の男女比はあまり変わっていませんね。全教科を平均してみると、女子学生の割合がやや減り、男子学生の割合がやや増え、全体として半々ということで、好ましい傾向かなと思っています。

末松：教員養成課程においては、両性の学生がいた方が教育上もうまくいくということはあるのでしょうか。

豊泉：そうですね。教育の現場、子どもたちの世界に両性の教員が関わることは、まったく当然のこと、ごく自然のこととして受け止めています。一般的には、自然科学系は男性が多いと言われますが、数年前には、男性が4割で女性が6割になったこともあり、一概に理科好きは男性だということはないようです。それに比べ、数学の方が男性への偏りが大きいようです。

優秀な人材の採用を進めた結果、 女性の比率は22%

末松：女性研究者の状況について伺いたいと思います。

豊泉：10年前の平成16年、女性教員は15人で、割合としては16%でしたが、今年4月の段階で、女性教員は20人、割合としては22%に増えています。この間、各



教科で女性教員の割合が増えています。近頃は学部の中で男性教員、女性教員というのをあまり意識しなくなったのではないかと思います。特にポジティブアクションのような動きはしてこなかったですけども、公募を徹底し、応募者の中で優れた人を探ると、結果として、女性が増える傾向に繋がりました。社会科は10人のうち3人が女性ですが、優秀な人に来てもらったら、結果、女性が増えたということです。

末松：子育てをされている先生方から、教育学部では非常に講座内での関係が良くて、手助けしあえる状況にあると伺いました。講座内が少人数であることが、チームワークに結びついていますね。

豊泉：講座の中での仕事は顔の見える関係で行われています。男女問わず仕事分担をしていて、それが見えるから必要なときはサポートできるのだと思います。

末松：今回、産休の先生の後に非常勤の先生を採用されたわけですが、どのような配置状況ですか？

豊泉：通常では、半期1コマ、通年で2コマ程度の非常勤を採用していたのですが、今回の場合は、半期2コマ、通年で4コマの非常勤を配置しました。

優秀な女性たちが管理職として 活躍できる現場に

豊泉：教育学部というのは教員養成ということで、子どもの育成に関わる学部ですので、単に女性の管理職を増やすということではなく、子どもの育成と教育の場に男性がもっと積極的にかかわっていくのが大事かと思っています。群馬大学を卒業する男子学生たちには、男女共同参画推進意識を醸成させていきたいと思っています。一方で女子学生たちには、ぜひ現場に行き力発揮していただき、リーダーシップを取って、管理職になってほしいと思います。

末松：大学運営においても教育学部の女性の先生に積極的に活躍していただけたらありがたいなと思います。